えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第99号
平成29年
(2017)
9 － 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

東京駅 100 年のものがたり ……1～3
新役員紹介（私のプロフィール）……4～5
友の会セミナー
「大河ドラマ『おんな城主 直虎』と時代考証」……6
友の会セミナー
「江戸図の出板を考える―二つの切絵図に至るまで―」‥7
えど友広小路……8～9
サークル紹介「太田道灌ゆかりの地を訪ねる会」／えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより／友の会めも
友の会特別観覧会「戦国！井伊直虎から直政へ」……10
江戸博クリップ「安全安心を第一に」……10
江戸名所図会を歩く…㉝［四谷から四谷大木戸］……11
催事案内……12

首都東京の表玄関
東京駅100年のものがたり
丸の内・八重洲

『えど友』第69号（平成24年）のトップ記事で、「東京駅丸の内駅舎の復原完成間近」と題して、東京駅の誕生、その復原工事とその見どころなどをご紹介しました。東京駅が開業して103年になります。そして今年、東京マラソンのゴール（フィニッシュ）が東京駅前・行幸（ぎょうこう）通りに変更されました。この冬には皇居を望む丸の内駅前広場が完成の予定です。日々進化し続ける東京駅。そこで今回は、大震災、戦争、火災など幾多の苦難を乗り越えてきた首都東京の表玄関「東京駅」の昔にスポットをあて、さまざまなエピソードとともにふり返ってみたいと思います。

所蔵　中央区立京橋図書館

丸の内・三菱ヶ原

丸の内とは「曲輪（くるわ）」＝郭（くるわ）の内という意味で、城下町によくある地名です。江戸城の場合、城郭は寛永13年（1636）には完成していますので、そのころから「丸の内」の呼称はあったものと思われます。江戸の川柳に「夕立を四角に逃げる丸の内」というのがあります。広壮な大名屋敷が軒を連ねていた丸の内、いかめしい門と白壁に囲われた場所で急な夕立に見舞われたら四角に散り散りに逃げていくしかなかったでしょう。現在の丸の内は巨大ビルが林立しているので、現代川柳としても十分通用しそうです。

明治5年（1872）和田倉門内にあった旧会津藩邸の兵部省から発生した火災によって、丸の内、京橋、銀座までが一面の焼け野原になってしまいました。銀座はその後すぐに一大商業街「銀座煉瓦街」に生まれ変わりますが、丸の内一帯は荒れ地のままとなっていました。

その後、陸軍の兵営や練兵場が建てられましたが、明治期後半になって、これらの移転に必要な資金を得るため、政府は豪商三菱の岩崎彌太郎に頼み込み、そのほとんどを購入してもらいます。兵舎やその他の施設を取り払った後、そこは雑草の生い茂る一望の原野となり、「三菱ヶ原」とか「賭博ヶ原」といわれるようになりました。賭博ヶ原の名の由来は、背丈を超える雑草にまぎれて

人力車夫たちが、白昼ひそかに賭け事に熱中したためだそうです。

東京駅開業

その三菱ヶ原に東京駅が誕生します。荒涼とした原っぱに出現した東京駅の風景を、「戦艦が洋上を走っている姿に似ている」と言った人がいたそうです。直木賞作家の朝井まかてさんは小説「落陽」の中で、開業の様子を次のように描写しています。

〔東京駅が開業式を行ったのは、大正３年(1914)12月18日だ。計画当初、鉄道院の後藤新平総裁は「露西亜を負かした帝国日本にふさわしい、世界が驚嘆するような駅を」と命じ、工期は６年半、総工費は280万圓を費やした。完成した建物はルネサンス風建築であるが、鉄道院は初め桃山様式の御殿造りを腹案にしていたという。中央停車場を宮城に向けて設計するので、皇室に配慮したのだろう。ところが明治天皇に伺いを立てると、―ステンショのごときは、外国式がよい。合理的判断が下され、西洋式の建物設計へと変更がなされた。開業式の日は師走であるというのに、まるで春のごとき陽射しが満ちていた。〕

この年、第一次世界大戦が勃発、日本は日英同盟を盾にドイツに宣戦布告、一挙に青島(チンタオ)を攻略し勝利します。開業式典では凱旋した神尾光臣(みつおみ)中将と大隈重信首相ががっちり握手する場面まで演出しました。翌日の東京朝日新聞は「来賓席に居並んだ一千五百の朝野の高位大官綺羅星のごとく、拍手の音は大堂伽藍に鳴りを起こす」とその熱気と興奮を伝えています。ところが、開業式、祝賀会の後、招待客の試乗する東京～横浜間の臨時電車が鶴見付近で立ち往生、往復48分の予定が２時間もかかってしまい非難ごうごう、鉄道院総裁の謝罪文の発表、関係者の処分にまで発展しました。

今や、安全性と正確性において世界一を誇る日本の鉄道ですが、初期のこうした苦い経験や、その後の桜木町、三河島、鶴見事故など多くの痛ましい事故を教訓にして築き上げられたものといえます。

豪華な駅舎・施設

こうして誕生した東京駅ですが、赤レンガを積み上げた左右対称の洋風３階建て、全長323ｍ、両翼にドーム屋根を持ち、ホールの八角形の天井には十二支の壮麗なレリーフが飾られていました。

当時ですから駅中央部には貴賓室、皇室専用の通路も設けられていました。驚くのは４カ所ある公衆トイレすべてが水洗になっていたことです。今年亡くなられた三浦朱門さんが「東京駅に思う」というエッセーの中で母の思い出を語っています。「母が女学校に入るころになると、東京駅が完成したが、そんな不便な駅を利用することもなかったが、ある時―あるいは彼女は必要もないのに、新しい駅が珍しく、ことさらにここで下車してみたのかもしれない―東京駅に行った。お手洗いに入った。使用後はハンドルを引けと指示されていたから、その通りすると、ゴーと大変な勢いで水が流れてきた。母は操作を誤って、水洗トイレを壊したかと脅えた。きっと駅員が血相を変えて駆けつけると思って、その時は説明をしようと、しばらくトイレのドアの前に立っていた。すると駅員が来ないうちに、トイレの水音は止まり、戸を開けてみると使用前と全く同じ状態になっていた。母にとっての最初の水洗トイレ体験であった。」何とも微笑ましいエピソードだと思います。

▲復原なった丸の内駅舎　　イラスト：福島信一さん

狙撃・暗殺の現場

大正10年11月４日、平民宰相といわれ国民的人気の高かった原敬(たかし)首相が乗車口ホールの衆人環視の中で刺殺されました。犯人は大塚駅転(てん)轍手中岡艮一(こんいち)(19)で、駅での評判は暇さえあれば本を読んでいる温厚な青年だったといいます。この年は東京駅にとって大変な厄年(やくどし)で、駅の上

▲原敬首相遭難現場

にある東京ステーションホテルで朝鮮時事新聞社の閔元植（ミンウォンシク）社長も暗殺されています。そして東京駅では、9年後の昭和５年(1930)11月14日に、もう１人の首相が右翼の青年に襲撃され、その傷が原因で翌年亡くなっています。ライオン宰相と呼ばれ親しまれた浜口雄幸（おさち）首相です。両首相とも圧倒的に貴族院が優位だった時代の衆議院議員であり、大正デモクラシーの代表といわれた人たちでした。２人の遭難した場所は、現場を示す目印が埋め込まれ、壁面には説明プレートが掲げられています。

▲浜口雄幸首相遭難現場

八重洲口

開業時、東京駅の八重洲側には多数の引き込み線があったため、乗車口も降車口もなく、日本橋方面の住人は不便を強いられていました。昭和４年、駅開業15年目にして、やっと念願の八重洲口が設けられます。小さな駅舎でしたが、日本橋、京橋の人々からは大いに喜ばれました。

下の写真は昭和初期に撮られた珍しい上空から見た東京駅です。水をたたえた外濠に架かる八重洲橋、引き込み線をまたぐ跨線橋などが見えます。

そして終戦後の昭和23年11月、装いも新たに八重洲口の駅舎が完成しました。ところが半年も経たない翌年４月29日、よりによって天皇誕生日のその日に火災が発生、新しい八重洲口駅舎の大半を焼失してしまいます。私はちょうどその日、旗日で休みだった父に連れられ遊びに出かけて、偶然その火事を目撃しました。燃え上がる炎ともうもうたる黒煙、そして火事を見ようと現場に集まった群衆の多さに何よりもビックリしたことを子供心によく覚えています。

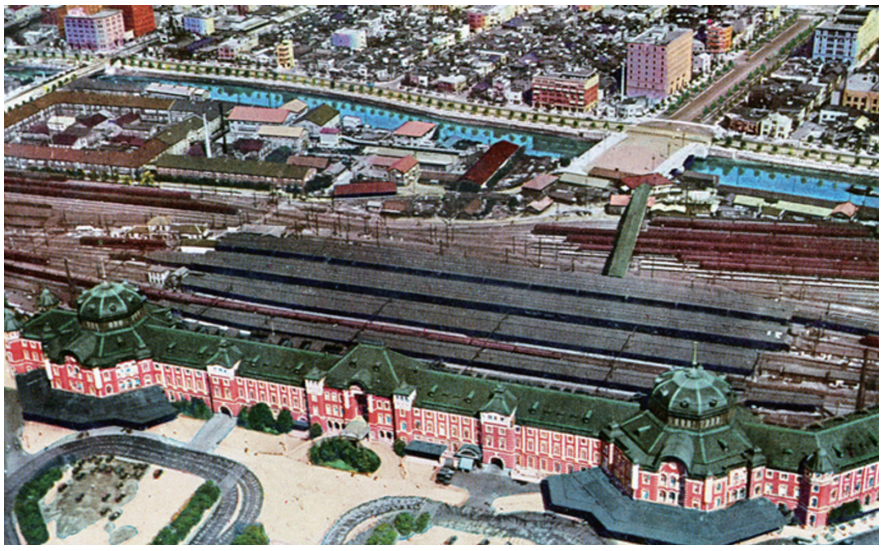
震災と空襲、そして東京駅メモリアル

大正12年９月１日午前11時58分、関東地方を襲ったマグニチュード7.9の巨大地震、いわゆる関東大震災は死者・行方不明者10万５千人を超す大惨事となりました。鉄道被害も甚大で、神田、有楽町、新橋などの駅も無残なまでに倒壊または焼失してしまいました。そんな中、東京駅はほとんど無傷で、赤レンガの巨大な駅舎はびくともしませんでした。しかも死者はゼロ、軽傷者はたった２人というから驚きです。いかに設計に優れ、基礎工事が入念に行われたかが証明されました。

▲未曾有の大地震に耐え抜いた東京駅
所蔵　中央区立京橋図書館

その東京駅が、昭和20年５月25日米軍の激しい空襲で駅舎が焼夷弾によって火の海となり、さしもの堅牢なドーム屋根も焼け落ちてしまいました。それでも駅長以下、職員の懸命な消火活動と避難誘導によってこの時も死傷者を１人も出さずに済みました。

東京駅５、６番線ホームの端に現在、鋳鉄（ちゅうてつ）製の柱２本が立っています。戦火をまぬがれた14本の柱が一昨年(平成27年)まで開業当時のまま使用されていました。老朽化のために新しい柱に置き換えられましたが、開業時の姿を後世に伝えるためにその内の２本だけが保存されています。柱頭部にはコリント式の装飾が施されており、100年以上支え続けてきた貴重な柱であり、たくましい歴史の証人でもあります。



▲昭和初期の東京駅　　提供：くにたち鉄道情報館

【取材】文・写真：広報部会・岡本　脩

参考資料：
『東京驛々史』東京南鉄道管理局編
『東京駅の謎』話題の達人倶楽部編
ＪＴＢの交通ムック『徹底解剖！東京駅100年』
辻　聡著『東京駅の履歴書』

新役員紹介（私のプロフィール）

会　長　早川（はやかわ）　良躬（よしみ）

歴史と出会ったのは就学前、湯船で父が語る頼山陽『日本外史』。彼の詩『八幡公』『本能寺』の吟詠も。今も耳の奥で鳴っています。仕事先、都公文書館の『東京市史稿』編纂、刊行。88年間に167巻で未だ中盤。起草者の気宇、歴史観に息を呑みました。翻って友の会。博物館によるサービスの受け手のみならず、誰もが何らかの形で歴史的成果をものにし、自己実現を図っている―これこそ、最大の魅力ではないかと思います。

事務局長　柏原（かしわばら）　典雄（のりお）（事業部会）

事務局長も２期目です。お陰様で何とか来られました。昨年度から、休館にともなう色々な懸案に皆様と一緒に取り組んできました。あと一踏ん張りです。ところで先日、15年継続会員として記念の手拭を戴きました。15年は長いですが10年程は年に数回、常設展を見に来るくらい。よく続いたなと感心しています。大きな懸案、事務局の引越が一段落したら、15年継続とあわせて自分に乾杯……です。皆様のご協力をよろしくお願いします。

副会長　林（はやし）　正信（まさのぶ）（事業部会長）

今、振り返ってみると、平成27年５月より事業部会役員を務め、この度は、事業部会長として役員の再任をしていただき、誠にありがとうございます。最近では、『えど友』等のおかげで知識も増え、時代小説を読みながら、「切絵図」と見比べ悦に入っています。今後、江戸博の休館もあり、３部会が共に力を合わせて「すべては会員のために！」をスローガンとして、微力ながら、頑張ってまいります。皆様のご協力の程よろしくお願い申し上げます。

会　計　並木（なみき）　愛（あい）（総務部会）

江戸博に来ると何となく晴れやかな懐かしい雰囲気に包まれるように感じる時があります。５階の常設展は多くの先輩や友人達と迷子になりながら時を忘れて過ごした思い出が残っている所です。私達の幼少期の町の暮らしは江戸の文化の名残の中にいたように思います。戦後、会社勤めを退職してから案内してもらい江戸博を訪れたのが最初でしたが、その後、友を失いました。以後ボランティアに参加して皆様に色々とお世話になっています。

副会長　菊池（きくち）　真一（しんいち）（広報部会長）

生まれ育った目黒区が坂道の多いところだったため、街歩きの途中で坂に出会うと風景に親しみを感じます。現在の東京の坂は江戸時代からあるものが多く、歩きながら歴史を体感できるのも魅力です。表示杭に坂の由来が書かれていると、ついつい見入ってしまいます。これからも会報誌『えど友』の取材を含めて「坂歩き」を楽しんでいきたいと思っています。今回は思いもよらない大任で手探り状態ですが、よろしくお願いいたします。

会　計　内匠屋（たくみや）　京子（きょうこ）（広報部会）

お江戸日本橋を渡り、タイムスリップしたかのような常設展示室に足を踏み入れてから江戸博ファンとなり友の会に入会して、10年になろうとしています。行きたくても個人ではなかなか行けなかった名所旧跡に見学会で訪れたり、月に１回、部会の皆さまとお会いしたりするのも楽しみな日々です。今期は一時休館もある変則的な時期ですが、和気藹々たる中にも活発な役員会になるよう努力したいと思っています。よろしくお願いします。

副会長　松原（まつばら）　明子（あきこ）（総務部会長）

最初は主人について友の会の行事に参加していましたが、「刺身のツマ」のままではつまらないと思い、７年前に入会し、総務部会に所属、えど友生活を楽しんでいます。生け花の教授活動を30年以上やっている関係もあって、毎年の総会では舞台のお花を生けさせていただいておりますが、いい勉強になります。方向音痴の私ですが、会の方向だけは間違わぬよう注意しながら明るく楽しい運営を目指して、頑張りたいと思っています。

川上（かわかみ）　由美子（ゆみこ）（事業部会員）

第１期を無事？に勤め上げ、第２期目に入りました。休館や大ホールの改修等前途に立ちふさがるものの大きさにたじろぐ思いですが、初心を忘れずに頑張るしかありません。私の初心、２年前のプロフィールにこうあります。「皆様の友の会ライフが充実した楽しいものとなるように、また自分自身の『江戸』に対する思いと知識がより高められるように努力したい」その通りです。これから２年間、またよろしくお願いします。

５月26日開催の第17回定期総会で選出された新役員16名の役割分担と、プロフィールをご紹介します。イラストは総務部会員の藤井文乃さんです。新役員へのご支援、ご協力を今後ともどうぞよろしくお願い致します。

國定（くにさだ）　美津子（みつこ）（事業部会員）

友の会会員歴9年目。改めて「歴史とは何ぞや」を思う。消えても記憶に残れば存在し、いつでも、どこでも、取り出して頭の中に陳列可能。それは、動物にもある現象。辞書に「歴」とは分明であること。「歴々」は①次々と並ぶ　②明白なさま　③昔からの権威者。「歴史」は人類の過去の変遷・興亡のさまとある。言葉の伝達も歴史になり、狭い日本には適した方法。でも、頭内博物館には限度があり、博物館・書物・映像は重要ですね。

鈴木（すずき）　とき子（総務部会員）

家族が友の会発足と同時に入会、古文書講座・セミナー・見学会等に参加していました。私も同伴者可の時には参加させて頂きました。見学会は私には初めての場所が多く、楽しんで歩きました。サークル「江戸御府内八十八カ所をめぐる会」が始まると同時に友の会と総務部会に入会しました。見学会とサークルにより行動範囲が広がり、知識も豊かになった感じがします。何ごとも勉強と思い、取り組んで参ります。よろしくお願い致します。

岡本（おかもと）　脩（おさむ）（広報部会員）

古稀の年まで働いた後、友の会の会員になった。あれからもう5年、年とともに人生の歩みが早くなる。最近、24年間続けた町会の役員を辞めた。そして思い切って年賀状も終わりにし、運転免許も自主返納した。この頃はスーパーの買い物と台所に立つ楽しみを少し覚えた。アラフォーならぬアラエイト、テレビに向かって文句を言ってはアラさがし、そして時おり、昭和の昔を懐かしんだり、時代小説で江戸の風に吹かれたり、残された人生を気ままに！

平川（ひらかわ）　亮一（りょういち）（館蔵古文書翻刻プロジェクト）

関西の出身ですが、小学生の頃から時代小説を読み耽ったため、何時かは「江戸」をもっと深く探求したいと思っていました。退職後は念願が叶って毎日が江戸漬けの生活を送っています。08年に江戸検定に合格したのを機に古文書解読を始め、今回館で眠っている古文書を翻刻によって広く人々の目に触れさせるという事業に意義を感じてプロジェクトに参加しました。皆様のご支援を仰ぎながら、微力ながら努力して参りたいと思います。

中村（なかむら）　貞子（ていこ）（広報部会員）

友の会に入会したのは2006年、会報『えど友』の奥付に名を連ねるようになって8年目を迎えている。入会当初はさして歴史に興味があるというわけではなく、今でも自分が歴史好きとは思わないが、『えど友』の編集作業や、見学会、『江戸名所図会』の輪読会サークル活動などを通してそれらしき分野への興味はどんどん広がってきた感がある。自分の家の系図や墓などの解析に取り組めたのも友の会のおかげかもしれない。

監　事　　畠中（はたけなか）　勇（いさむ）

４年間の会長職に続いて、監事を務めます。これから１、２年間は江戸博の休館などが予定され、友の会事業もいろいろ制約されることでしょう。役員、各部会の皆さんと力を合わせ、会の発展と会員交流に努めます。江戸博とは、20年にもなる付き合いになります。友の会とも10年以上、歴史は好きですが勉強嫌い、でも秋から、古文書講座入門コースで勉強予定……いまさら、と言われそうですが、頑張ります。

鈴木（すずき）　正文（まさふみ）（総務部会員）

浅草で生まれ、浅草の花街＝実家は料亭＝で青春を過ごす。イタリア国立フィレンツェ大学経済学部観光学科卒業。帰国後、在日イタリア政府観光局奉職35年間。現在は鈴乃家流かっぽれ家元、芸名は鈴乃家梅奴（うめやっこ）。4月にイタリアで4回公演し、大好評。演目は「江戸後期の文化・考、かっぽれ発祥の謎」。踊りはかっぽれなど3曲、横笛の演奏も披露。江戸博の会員になり、魅力満載の江戸文化の吸収に精力を注ぎたいです。

監　事　　小笠原（おがさわら）　広樹（ひろき）

このたび、監事を仰せつかりました。館とのかかわりは、1993年、都で広報の仕事をしており、鈴木知事が日本橋を渡る時も取材をしていました。それから、昨年の夏まで少しの間ですが参事の仕事に携わり、館の魅力を知ることができました。友の会は、魅力ある事業を展開する素晴らしい会です。事業を楽しみながら、会の円滑な運営に関わっていきたいと考えています。趣味の一つは街を知ることです。どうぞよろしくお願いします。

第177回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成29年6月17日）

大河ドラマ「おんな城主 直虎」と時代考証

講師　小和田哲男さん（静岡大学名誉教授・文学博士）

私は、今回も含めて、ＮＨＫの大河ドラマの時代考証を数多く担当しています。要は放映される時代のシーンがその時代に合ったものでなければなりません。“矢でも鉄砲でも持ってこい”や“お眼鏡にかなっている”というセリフですが、鉄砲や眼鏡は戦国時代のはじめにはありませんので、駄目です(笑)。また、駿府の場面ではよく富士山が入ってきますが、これも要注意、右の少し盛り上がった宝永山はこの時代にはありませんからね。また、細かいことを言ってくる人もいて、武将たちが大きな絵図を広げる場面で、“大きな絵図なのに継ぎ目がないのはおかしい”というクレームがあり、先日、ＮＨＫに細かく切って貼り合わせるよう申し入れておきました(笑)。

井伊直平の子供たち

井伊谷の井伊家は遠江の国人領主(国衆)でもともとは今川家と敵対する斯波氏に仕えていました。しかし、曽祖父の直平の代に今川義元に臣従するようになります。この直平には５人の息子と１人の娘がいました。１人しかいないこの娘が人質として今川家に出され、この女性が義元に気に入られて義元の側室になり、その後、義元の妹ということになって関口氏と結婚、瀬名姫－築山殿－が誕生しますが、この築山殿は後に殺害され、その長男・信康の自害はご存じの通りです。

直平の５人の息子について説明します。まず、長男の直宗ですが、直盛という一人息子を生んだ後の天文11年(1542)に三河で討死しました。今川家の重臣となった直盛の子供が次郎法師で、男ではなく女の子でした。次男の直満は四男の直義とともに、今川家に逆意ありと家老の小野和泉某に讒訴され、天文13年12月に駿府で義元に殺害されました。三男の南渓は身体が弱く、非力だったのでしょう、僧侶です。当時は大名や重臣の家で男の子が５、６人いたら、１人は仏門に入っていました。“一子出家すれば、九族天に生ず”という言葉が残っています。他の兄弟は侍で、人を殺すのがいわば仕事、兄弟たちが地獄に落ちるのを１人仏門に入れて救済しようとしたのです。五男の直元につきましては何も分かりませんが、とにかく５人の兄弟のうち３人が若くして亡くなり、１人は僧侶という中で、長男直宗の惣領息子直盛にも悲劇が襲いました。

桶狭間で直盛討死す

直盛の子、次郎法師という名はちょっと聞き慣れませんが、井伊家では備中法師とか、この次郎法師という名がよく使われ、井伊家惣領の名でした。男の子を欲しがった井伊直盛は、叔父直満の子亀之丞を養子にとり、次郎法師と夫婦になるよう約束していました。が、井伊家の家督を継ぐべき男、亀之丞は父直満、叔父直義が殺害されたために命の危険を感じ信州へ逃亡してしまい、悲嘆にくれた次郎法師は南渓和尚の弟子となり出家し、龍潭寺での生活が始まります。

そんなところに大事件発生です。永禄３年(1560)５月19日、桶狭間で織田信長の軍勢に急襲され、今川義元とともに井伊直盛が討死してしまいました。このとき、立場上はまだ今川の人質で出陣していた松平元康(家康)が義元の傍にいたら、殺されていたわけで、徳川時代は無かったでしょう。それを考え出しますと夜も眠られなくなります(笑)。その後、信州へ逃亡していた亀之丞が10年振りに戻ってきますが、もう、次郎法師は還俗せず、亀之丞と結婚しませんでした。次郎法師にふられ、しかし井伊家を継がなければならない亀之丞は直親と名乗り、しのという女性と結婚、一人息子虎松が生まれました。

直虎　城主となる

当時、三河にいた家康の勢力が大きくなりつつあり、遠江周辺ではいざこざが絶えませんでした。その家康と直親は内通している疑いあり、と今川家に密告され、なぜ直親が出掛けて行ったのかは謎ですが、駿府に行く途中、今川家筆頭家老のいる掛川城の兵たちに殺害されました。永禄５年12月のことです。掛川には十九首というところが現存しますが、ここで直親と部下18人が切り殺されたのです。当時、家を継ぐべき虎松はわずか２歳。こうして井伊家惣領として生まれた次郎法師が、虎松が成人するまでの後見役として、井伊谷を治める領主になりました。このころから直虎という男名を名乗るようになったのだと思います。

徳川幕府を支えた井伊家

力を蓄え勢力を伸ばした家康が遠江に侵攻し、当時引馬城(浜松城)と呼ばれていた城を居城としたのが元亀元年(1570)。それから５年後、15歳になった虎松を正装させ、家康にお目見えさせたのが天正３年(1575)２月でした。家康は自分との内通が疑われ、殺された男の子供であることを知り、また、ちょうど同じ年ごろで自害した信康の面影と虎松を重ね合わせ、自分の身内のようにかわいがりました。虎松は後年、井伊直政と名乗るようになり、徳川四天王の１人として活躍、その子孫は徳川幕藩体制の維持・発展に大変な貢献をしました。いわば徳川幕府を支えたのが井伊家で、井伊家の危機を救ったのが直虎だったのです。

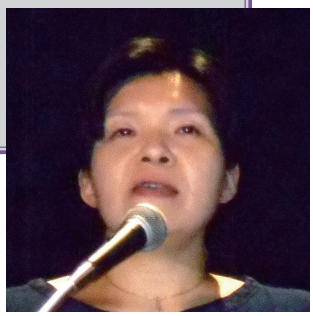
参加者178人。

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

第178回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成29年7月15日）

江戸図の出板を考える
―二つの切絵図に至るまで―

講師　齊藤　智美さん（明治大学文学部兼任講師）



はじめに

―江戸図とは？―

切絵図の話を始める前に、江戸図について述べたいと思います。江戸図とは近世に描かれた江戸の絵図のことで、写本・刊本とも他都市に比して多数あるのが特徴です。中でも寛文10年(1670)から13年にかけて板行された「寛文五枚図」は、「江戸図の祖（おや）」とも呼ばれ、その後発行された江戸図の参考にされたと考えられます。それというのも①大名屋敷の入口が分かるようにしたこと、②測量して描かれたらしく、方位、縮尺がある程度正確だからです。この図以降に測量されたものは、伊納忠敬が測量するまでないと考えられ、長期にわたり利用されました。他に、延宝８年(1680)に板行された『江戸方角安見図』は、「寛文五枚図」を参考にしながら、初めて地図帳にしたことが画期的でした。これによって、携帯したり狭い場所でも楽に絵図の利用ができるようになったと考えられます。

刊本と写本の違い

写本は、制作者の考えに基づき個別に制作されます。これに対し刊本は、制作者と板元、購入者が関係しています。現在でも書店の一部には、出版社と販売店を兼ねているものもありますが、普通は別々の存在です。ところが、近世の板元は両方兼ねているのが当たり前でした。さらに、儒書や仏書など専門書や堅い書物を取り扱う書物問屋と、戯作など大衆受けするものを板行・販売する地本問屋に分かれ、それぞれが株仲間を構成していました。書物問屋は月行事（がちぎょうじ）を中心に運営され、書物の審査を行っていました。書物の内容が幕府の触を守っているか、過去に似たような書物がなかったかを吟味しました。江戸図については、書物問屋、地本問屋双方が取り扱っていました。

『江戸絵図株帳』について

文化14年(1817)、江戸書物問屋仲間の三組（みくみ）行事によって『江戸絵図株帳』が作成されました。江戸絵図は板行される中で、次のような問題が生じていました。

① 江戸図の板木は昔からあったため、板木所有者が方々に散らばっていた。
② 火事などで板木を消失した後も、板株は継続していた。
③ 旧所有以外の者が板木を新規に彫り直した場合、板株をめぐって争いが起きた。

上記から生じる書物問屋同士の争いを避けるため、書物問屋の中で、江戸絵図の板株を持っている者に届け出をさせました。その結果できあがったのが『江戸絵図株帳』です。一方、『江戸絵図株帳』において地本問屋仲間は、４軒の地本問屋以外板株を持っていないことも確認しました。

切絵図の板元

切絵図は江戸を分割して表した絵図。最新情報を入れ込むため、中身が変化していたと考えられます。板元としては４軒ですが、江戸全体を切絵図にして発行したのは、２軒でした。「近吾堂(近江屋五平)」と「尾張屋(尾張屋清七)」です。近吾堂は元々麹町の荒物屋でしたが、武家屋敷が多く、道の入り組んだ番町が近かったため、道を尋ねる人が多くありました。また、武家屋敷は映画やテレビの時代劇のように表札がかかっているわけではありません。そのような状況の中で道案内をすることは大変であったため、摺り物にして売り出すことにしました。これが近吾堂板切絵図の由来です。ところが、近吾堂は書物問屋でも地本問屋でもないため、切絵図を出板することについて、当初は奉行所から危惧を持たれたようです。切絵図の価格設定について、大きさや摺りの回数が同じような絵図と同等の値段にするように指示されています。近吾堂は、書物問屋の切絵図を元にしているため、文字情報も多く実用的でした。

一方の尾張屋板切絵図は、元来地本問屋であったためか、絵画的要素を持つことから、昨今の観光地図的な需要が多く、また江戸土産としても圧倒的に求められました。

おわりに

―江戸図出板の検討を通して―

出板された江戸図の板元は、主に書物問屋、地本問屋の二つに分かれていました。書物問屋仲間は、『江戸絵図株帳』で、板株を持っている者を把握していました。近吾堂の切絵図は、色は淡いが文字情報が多く実用的です。対する地本問屋の尾張屋板は、色数が多く鮮やかで見ていて楽しいという特徴を持っていました。

レポーターからひとこと

切絵図に区別のあることは知っていましたが、２種類しかないことは知りませんでした。リアルタイム的な情報を必要とせず、観光地図的な使い方しかしない現代人にとっては、絵画的要素の強い尾張屋板のほうが人気なのはよく分かります。参加者142人。

【記録】文・写真：広報部会・光田憲雄

えど友 サークル紹介

太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

通称「道灌倶楽部」と呼ばれる当会は、世話人の松原良さんが「江戸御府内八十八カ所をめぐる会」、「神田川を歩き楽しむ会」、「『落語で江戸散歩』をなぞる会」に続いて平成28年8月から活動を始めたサークルです。文字通り、江戸東京の礎を築いた太田道灌の数多あるゆかりの地を訪ねて回ります。会員数が100人を超える大所帯のため、通常は都内や近郊のゆかりの地を月末の木曜日と日曜日の2回に分けて訪ねています。第9回目の活動となる4月は「山吹の里伝説」の有力候補の一つといわれる「越生」を、サークルとしては初の貸し切りバスで回るという特別バージョンになりました。

池袋発の電車の中では、松原さんが用意した詳細な資料を皆さん熱心に読んで予習。越生に着くと現地集合の人たちと合わせて44人の会員が駅前で待っていた貸し切りバスに乗り込みました。今回は会員の紹介による越生在住の文化財保護委員、金子さんがバスに同乗して案内してくださいました。普段の活動では友の会の見学会のように決まった案内人はいませんが、訪問先によっては太田道灌公18代ご子孫の太田資暁さんのつてで現地ガイドをお願いしたり、太田さんご本人や、『道灌紀行』の著者である尾崎孝さんが解説したりすることもあるようです。

バスはまず山吹の里歴史公園から始まって、道灌の父、道真の隠居所である自得軒跡とされる健康寺、道真、道灌父子の墓のある龍穏寺と回りました。ちょうど山吹の花が満開の時期と重なり、途中、道灌とは関係ありませんが五大尊つつじ公園にも立ち寄ってツツジの花も楽しみました。「太田道真退隠地」の石碑が立つ健康寺では檀家総代の戸口さんのお話を聞きながら、自家製の甘酒、梅ジュース、梅干しのお接待までいただきました。梅干しはさすが、梅の里という味で絶品！　龍穏寺はバスで20分ほど山道を登った町外れにあります。一般的にはあまり知られていない曹洞宗のお寺ですが、江戸時代には曹洞宗関東三大寺の一つで、永平寺をもしのぐ勢いがあったとご住職の山本さんが解説してくださいました。経蔵、山門など残った古い建造物には威厳があり、境内全体が森閑として歴史の重みを感じさせる雰囲気に満ちていました。

▲龍穏寺

越生の梅林には2度ほど来たことがありますが、これほど道灌に縁のある地とはつゆ知らず。見頃の山吹、ツツジ、シャガ、藤の花、そして目に眩しいほどの新緑が美しい季節に同行取材できた上、最後は池袋で有志による反省会を兼ねた打ち上げの飲み会にまで参加するという充実の1日でした。

【取材】文・写真：広報部会・中村貞子

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

6月24日(土)月番は松原良さんと森川昌子さん。世田谷区立郷土資料館近くの世田谷信用金庫本店のせたしんふれあいホールで開催された「立川こはる せたがやふれあい落語会」を鑑賞した。落語会では、立川流で初の女流落語家・立川こはるさんが2席、世田谷信用金庫落語研究会のメンバーの落語(2人)とマジックを堪能した。参加者15人。

7月25日(火)月番の島田秀孝さんによる柳家小かじさんを招いての「前座の一日」の口演と、落語「真田小僧」「井戸の茶碗」の2席があった。参加者17人。

◆藩史研究会

6月9日(金)辻井清吾さんが大和国御所藩、布施藩、新庄藩、櫛羅藩を発表した。桑山氏、永井氏の立藩・改易、人間関係など複雑で、会員からは、熱のこもった質問が飛び交った。参加者11人。

7月14日(金)國定美津子さんが甘縄(玉縄)藩の発表をした。甘縄藩は現在の鎌倉市ＪＲ大船駅北側の玉縄地域に位置している。家康の関東入封に伴い、城は水野忠守・忠元親子が預かり玉縄領は本多正信が1万石で入封して玉縄藩が立藩する。寛永2年(1625)、松平(大河内)正綱が他領を含め2万2千余石で玉縄領を拝領し、3代正久の元禄16年(1703)に上総国大多喜へ移封となり玉縄藩は廃藩となった。参加者13人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会(名称変更)

館蔵古文書翻刻プロジェクトで「米屋田中家文書」の江戸期部分を翻刻することになり紛らわしいため名称変更した。

6月8日(木)米屋久右衛門の書いた明治3年の「日記」を読む。P225～248まで。11月、江戸の定飛脚問屋が和泉屋に合併して陸走会社となり、飛脚賃値下げの通知がくる。飛脚の請負・取次をしている六組(米屋田中家もこれに属す)は待合で寄合。飛脚業界に変化が見られる。参加者9人。

6月23日(金)明治3年P248～257、明治4年に入ってP1～9まで。参加者9人。

7月13日(木)明治4年正月11日～2月15日。参加者8人。

7月28日(金)明治4年2月17日～3月29日。1月に開店したばかりの紙屋だが、これまで出入りの大名家のほかに静岡藩(徳川家)賄所から

注文の記事が目を引く。また相変わらず、お砂蒔き(金性の者が吉方の神社などから取集めた砂を屋敷廻りなどに蒔く)を頻繁にしている。参加者９人。

◆江戸東京を巡る会

６月11日(日)明治神宮の御苑の菖蒲園で満開の花を鑑賞した後、本殿を参拝した。希望者のみで外苑の絵画館を見学し、明治天皇の偉業をしのんだ。参加者34人。

◆『江戸名所図会』輪読会

６月15日(木)佐土原一浩さんが担当。氷川明神社は現簸川(ひかわ)神社で、当初は小石川植物園の東、御殿坂辺りの貝塚の古墳上に鎮座。その後、承応元年(1652)徳松丸君(後の５代将軍綱吉)の邸宅の用地とされたため、現白山４丁目付近に移転。現在の高台に移転したのは元禄12年(1699)で、小石川総社としての記録がある応永29年(1422)からすでに300有余年を経ていた。参加者14人。

７月20日(木)石井義一さんが担当。板橋区を流れる新河岸川の南に位置する志村の清水坂は険しい坂で、清水坂下にある現薬師の泉庭園は、清水薬師如来の大善寺の境内にわき出ていた清水のあった辺りである。清水坂の上、西方の崖続きには現熊野神社(熊野権現宮)と千葉氏の城跡ともいわれる志村城山公園がある。参加者16人。

◆日本の大道芸伝承会

６月14日(水)がまの油売り、玉すだれ、生きている生首などこれまで伝わる大道芸と見世物口上を練習。参加者３人。

７月12日(水)深川江戸資料館主催の９月16日(土)にある「江戸の物売りと大道芸」イベントへ応援出演が決まった。今回で9回目の出演、マンネリ化だけは避けたいという思いである。参加者３人。

◆江戸を語る会

６月24日(土)大竹聿子さんが「落語を聞いて江戸を語ろう」の演題で発表した。古今亭志ん朝のコメント付きの落語「首提灯(くびちょうちん)」のDVDで小気味よい江戸弁とテンポの速さを体験した。この後、富士松松栄太夫さんから「落語のあれこれ」と題して落語の歴史、構成などの説明があった。参加者10人。

◆かっぽれの会

６月・７月 休会。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

６月25日(日)千駄ヶ谷駅ホームに集合、将棋会館最寄り駅にちなんでホーム中央にある「将棋の駒の碑」裏面の「太田道灌が千駄ヶ谷と命名した」との記載を確かめてからスタートする予定であったが、数日前から始まった駅の改修工事で工事用囲いの中にあるのを隙間から覗き見てのスタート。落合南長崎に移動し、太田道灌を助けた猫の伝承がある自性院・猫地蔵に参拝・見学。その後西新宿５丁目の十二社熊野神社に参拝・見学し、すぐ隣の新宿中央公園の「久遠の像」(山吹伝説のシーンを再現した道灌と少女の銅像)を見学した。参加者32人。

６月29日(木)１回目とほぼ同じコースを巡った。参加者39人。

７月休会。

◆文士達を巡る会

６月17日(土)今回は正岡子規の句碑を巡る会の前半。入谷鬼子母神の境内の句碑から歩き始め７カ所を巡った。子規が没するまで住んだ子規庵も訪ねた。句碑は神社内に立っているものが多く元三島神社、御行の松不動尊でお参りもした。その後谷中霊園を歩き、森鴎外の旧居が保存されている水月ホテル鴎外荘にも立ち寄った。参加者７人。

７月15日(土)正岡子規の句碑を巡る会の後半。下谷神社からスタートし、駒形堂、隅田公園、浅草鷲神社の句碑を巡った。８回目になると句碑を理解するために色々な話が出て盛り上がった。浅草七福神の待乳山聖天、吉原神社、吉原弁財天にも立ち寄った。参加者９人。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の２サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

館蔵古文書翻刻だより

◆A班『新古改撰誌記』

前回は目付及び目付支配諸役人について記載。今回と次回は目付支配諸役人中、最も人数が多く(5000名超といわれる)『新古改撰誌記』の主要な役職で、将軍家や幕府諸役人のために様々な雑役に従事した下働きの幕臣について記載する。下働きのため格式は御目見以下ではあるが、歴とした譜代席の五つの役職(五役)がある。「黒鍬之者」は頭３名(100俵高持扶持)、配下は470名(12俵１人扶持)で江戸城内の土木工事や作事、堀割などの清掃にあたり、物品の運搬や御使にも従事した。「中間」は頭３名(80俵高持扶持)、配下は550名位(15俵１人扶持)で江戸城内の御長屋門・大奥御長屋門・御台所前新土戸・西丸中の口門等の警備や、御使等に従事した。

友の会めも(開催日と人数)

平成29年６月～７月

◆役員会６月13日(火)16人。７月11日(火)15人。◆事業部会６月６日(火)18人。７月４日(火)22人。◆広報部会６月20日(火)10人。７月18日(火)10人。◆総務部会６月27日(火)18人。７月25日(火)10人。◆古文書講座 入門編：６月７日(水)午前104人・午後102人。７月５日(水)午前106人・午後97人。初級編：６月21日(水)午前69人・午後63人。７月19日(水)午前77人・午後70人。中級編：６月24日(土)午前51人・午後33人。７月22日(土)午前50人・午後38人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト６月１日(木)A班７人。B班６人。６月15日(木)A班９人。B班５人。７月６日(木)A班９人。B班６人。７月20日(木)A班９人。B班６人。

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成29年７月７日）

2017年 NHK 大河ドラマ「おんな城主 直虎」特別展「戦国!井伊直虎から直政へ」

NHK大河ドラマ「おんな城主 直虎」に連動した展覧会「戦国！井伊直虎から直政へ」、その特別観覧会が７月７日(金)17時から開かれました。杉山哲司学芸員により見どころ解説があり、その後それぞれ展示室を回って観覧しました。

戦国時代、遠江国井伊谷を拠点とする井伊氏は、周囲を駿河の今川、甲斐の武田、尾張の織田、三河の徳川などの有力大名に取り巻かれ、過酷な運命に翻弄されます。そして一族断絶の危機にまで追い込まれますが、井伊直虎がさまざまな謀略と陰謀渦巻く戦乱の世をしたたかに生き延び、やがては徳川四天王といわれた直政が彦根藩井伊家の礎を築いていきます。本展は同時代を生きた戦国武将や周辺の人物にスポットを当て、また井伊家に受け継がれた貴重な美術品、古文書など多数が展示されています。

井伊直虎に関する資料が少ない中、直虎の名と花押が記された唯一の書状「井伊直虎・関口氏経連署状」は大変興味深く、人垣ができていました。また女戦国大名と評される今川氏親の正室寿桂尼の朱印状の印「歸」は公家である父から与えられたもので、つらかったらいつでも帰っておいでという娘への父親の思いはいつの時代も変わらないようです。大河ドラマのセミナーで小和田哲男先生が寿桂尼に扮する浅丘ルリ子さんを「戦国時代あんなにクリクリした目の女性はいない」とおっしゃったことを思い出しました。

当主を継ぐことになった亀之丞(のちの直親)が信濃から井伊谷に帰国の途中、寺野六所神社に奉納した漆塗りの「青葉の笛」は撮影可能スポットで、演じた三浦春馬さんのファンでしょうか、女性が熱心にカメラを向けていました。

昨今の刀剣ブームを反映してか、数多くの刀剣が展示されていました。日光東照宮に伝わる徳川家康の脇差(重文)の他、井伊家の至宝である脇差「銘 兼光」と附 黄金造りの太刀拵や『享保名物帳』に記載された織田信長が所持した名刀織田左文字「刀 無銘 伝左」、井伊直政の指料「太刀 銘 来国光」など、どれも刀剣ファンを魅了するものばかりです。

戦国武将の着用した具足の中で一番目を引いたのは、徳川四天王の一人、猛将本多忠勝所用のもので、黒漆塗りの大きな鹿角と目にもあざやかな金箔の大きな数珠を袈裟懸けにした「黒糸威胴丸具足」です。この具足を身につけた眼光鋭い「本多忠勝像」も迫力満点で、ともに国の重要文化財に指定されています。

そして本展のハイライトは何といっても甲冑・武具を朱色に統一させた「井伊の赤備え」でしょう。戦場にはためく赤地に金の巨大な「井」の旗印は敵陣を恐怖に陥れました。「長久手合戦図屏風」「関ケ原合戦図屏風」「大坂夏の陣図」などすべてに天下にその名を轟かせた勇壮な赤い井伊軍団が描かれています。戦国の世に生きた人たちに思いをはせながら館を後にしました。

参加者111人。

【取材】文・写真：広報部会・岡本 脩

(この展覧会は８月６日に終了しましたが、現在、井伊家のふるさと静岡にて本展が開催されています。10月12日まで静岡県立美術館、その後、彦根城博物館に移動します)

江戸博クリップ

「安全安心を第一に」

管理課長　島村美也子（しまむら みやこ）

この４月から管理課長に着任した。３月までは、同じ財団の東京芸術劇場に在籍していた。着任直後、ホールと博物館は感覚的には正反対に位置するものだと思っていた。しかし、日々を過ごす中で、果たすべき役割としては都立の歴史・文化施設として、魅力ある展覧会や公演を提供することはもとより、その前提として、訪れるお客様の安全と安心を守るという意味で、同じであることを再認識した。

江戸博は、10月から半年間の予定で全館休館となる。誕生から四半世紀が経ち、老朽化したエレベーター・エスカレーターの更新やホールの改修等を行うためだ。施設の安全・安心のためには必要不可欠な工事ではあるが、2015年の常設展のリニューアルが好評で、海外からのお客様も増え始め、入場者数が堅調に推移している中でのことでもあり、個人的な思いとしては、残念なところもある。しかし、2020年にオリンピック・パラリンピックを控える東京の歴史・文化施設としては、国内外から訪れる多くのお客様に、安全で快適に楽しんでいただくための対策を欠くことはできない。しっかりとお客様をお迎えするためのハード・ソフト両面での準備期間として休館を前向きに捉え、2018年４月のオープン(一部開館)以降、より一層魅力的になった江戸博をお楽しみいただけるようにしていきたい。なお、まだ構想段階ではあるが、休館中もHP等を中心に江戸博の魅力を発信していきたいと思っている。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸 名所図会を歩く…㉝

[四谷から四谷大木戸]

真成院の潮干十一面観世音菩薩

前回までの世田谷区から再び都心へ戻り、四谷の辺りを巡ります。かつては江戸市街地の西境に近い地域で、四谷大木戸が設けられていました。歩いたのは梅雨入りが間近な6月上旬でした。

四谷から妙典山戒行寺

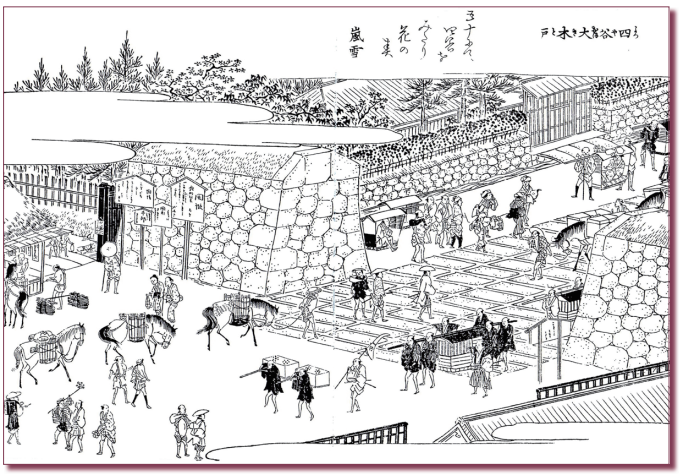
ＪＲ中央線四ツ谷駅の麹町口を出ると、目の前に四谷御門跡の石垣が残されています。ここから西の方、甲州道中(甲州街道)の内藤新宿辺りまでが四谷と呼ばれていました。現在の新宿通りがかつての甲州道中に当たります。

駅前で新宿通りを渡って西方向に進み、左手の脇道(西念寺横丁)から観音坂を下ると、右手に潮干観世音菩薩が安置されている錦敬山(現金鶏山)真成院があります。マンションと見まがうような堂宇の上階には「潮干観世音」ののぼりが何本もはためいています。受付に声をかけて3階の観音堂へお参りに行くと、ちょうどお坊さんが入ってこられて、お話を伺うことができました。戦災ですべての建物が焼けたため現在の堂宇は昭和47年(1972)に完成したもので、こうしたビルの中に堂を納める様式の走りだったそうです。本尊の潮干十一面観世音菩薩は小さなものですが、黒光りした姿は歴史の重みを感じさせました。

坂下を左折して右の戒行寺坂(油揚坂)を上ると、右手に妙典山戒行寺があります。たまたま最初に訪れた日は須賀神社(旧牛頭天王社)の祭礼だったため、境内では町内会の方たちが神輿や山車の準備中でした。本堂の右手前には火付盗賊改で有名な長谷川平蔵宣以の供養碑があります。平蔵の墓は杉並区に改葬されていますが、現在も平蔵の父宣雄など5人の火付盗賊改が当寺に葬られています。こちらの本堂もコンクリート造りですが、伝統的な様式を取り入れています。

牛頭天王社から忍原

坂上から右折して勝興寺の前を進むと、左手の駐車場の向こうに須賀神社の鳥居が見えます。図会で取り上げられている牛頭天王社は寛永18年(1641)に神田神社境内の牛頭天王社を四谷の氏神様として勧請したもので、同21年にこの地の稲荷社と合祀され稲荷天王合社となり、明治元年(1868)に須賀神社と改称されています。社殿は戦後再建されたものですが、風格のある建物です。社殿内に掲げられている天保7年(1836)奉納の三十六歌仙絵(新宿区指定有形文化財)の実物は通常間近に見ることはできませんが、「新宿ミニ博物館」として掲示板に写真が載せられています。境内には祭りの屋台が出て賑わっていました。



▲長谷川雪旦：四谷大木戸

鳥居脇の石段(女坂)を降りて左方向に行くと、鬼子母神を安置する高見山日宗寺が両脇をビルに挟まれた参道の向こうに見えます。本堂の前に日蓮上人の大きな銅像がありますが、お堂の中は全く見えず鬼子母神像は確認できませんでした。

さらに左へ進んで円通寺坂下から脇道を入って突き当たると、新宿通りに向かってゆるやかに下って上がる女夫坂に出ます。寛永年間、原野だったこの辺りを武蔵忍藩の高木筑後守が開発したので字が忍原となり、この通りは忍原横丁と呼ばれていました。

篠寺から四谷大木戸

新宿通りに戻ってさらに西へ進むと、左手に篠寺(笹寺)の参道があります。正式名は四谷山長善寺ですが、入り口の石柱には「曹洞宗四谷山笹寺」と書かれています。本堂はコンクリート製ながら唐破風屋根のある堂々とした造りです。木組みの山門を入ると右手に「四谷勧進角力始祖」の大きな石碑があります。初代横綱とされる明石志賀之助が寛永元年にここの境内で初めて勧進相撲を行ったという言い伝えに基づき、東京大角力協会が大正時代に建てたものです。しかし石碑には大きな亀裂が入り、全体を覆う金網によって何とか原形を保っている状態でした。また、徳川秀忠の念持仏を夫人の崇源院から賜ったと伝わる「めのう観音像」が本堂に安置されています。像を見ることはできませんでしたが、説明板には写真が載せられていました。さらに境内の一角には慶大医学部の実験動物を供養した「墓塚」があり、隣の台座に置かれた親子のヒキガエル像が実にユーモラスでした。

さらに進んだ先の四谷4丁目交差点が四谷大木戸のあった場所で、元和2年(1616)に大木戸が設置されて甲州道中の人馬の検問が行われていました。寛政4年(1792)に木戸が廃止されたため、図会の挿絵には両脇の石垣と石畳のみが描かれています。荷駄を背負った馬や大名駕籠・町駕籠・旅人などが行き交う様子は、目の前の自動車だらけの風景からは想像できません。ただ近くに四谷大木戸跡の石碑がひっそりと立っているばかりです。ここから東京メトロ丸ノ内線新宿御苑前駅に出て帰路につきました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・菊池真一
(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

古文書講座

９月からの第２期開講並びに留意事項

すでに申込は締切っておりますが、９月から下記日程で開講します。**前号でお知らせの通り、２回目(10月)以降の会場が下記に変更**になります。また**参加費が第２期から2,400円**となります。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：９／６(水)、10／４(水)、11／１(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：９／20(水)、10／18(水)、11／22(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
- 開催日：９／23(土)、10／21(土)、11／25(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：**各講座とも、９月は江戸博１階会議室、10月からの会場は飯田橋・新陽ビル４階の「リロの会議室　会議室A」となります。(前回封入した案内図によりご確認ください)**
- 定員：各講座とも80人(会員のみ)
- **参加費：各講座とも全３回2,400円(初回一括払い)**

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

見学会

定番・江戸城周辺探訪　－その２(内濠周辺)－

◆強大な幕府体制が創りだした近世日本最大の城郭である江戸城。その江戸城内郭(本丸、西の丸、吹上など)を取り巻く内濠は、敵の侵入をくい止める巨大な要塞であり、満々とたたえた水に映る高く築かれた石垣と松の緑との調和された姿は、他に比類がない美しい日本の美である。今回はその内濠を一周しながら、周辺にのこる遺跡、遺構を探訪し、天下人の居城であった江戸城の壮大さと歴史をしのびます。所要時間は約３時間、地下鉄九段下駅で解散となります。

- 開催日：10月８日(日)受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時15分　　受付終了：12時45分
- 集合場所：東京メトロ東西線・東京メトロ半蔵門線・都営新宿線「九段下」駅下車　昭和館前
- 申込締切：９月28日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】林　正信(事業部会)

広重『名所江戸百景』周辺探訪　－その 17(四ッ谷・新宿周辺)－

◆広重『名所江戸百景』は、安政期の江戸の四季、風景、風俗などをこまやかに描いた作品です。この企画では広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪し、今の街の姿のなかに江戸時代の風景、背景を思い浮かべ、そこに吹く風や情景を少しでも感じていただこうとするものです。市ヶ谷から四ッ谷周辺を巡り、新宿を経て西新宿まで歩きます。宿場町、内藤新宿の繁栄と馬の尻に加えて地面に配された、この地の名物(馬糞)を描いた、前代未聞の広重「四ッ谷内藤新宿」絵や、江戸時代、今の都庁北側一帯の広大な敷地には、大小二つの池があり、江戸近郊の景勝地となっていました。そこに熊野十二所権現社があり、参拝客で賑わっていたという、広重「角筈熊野十二社俗称十二そう」絵などを訪ねます。所要時間は約３時間半、都営地下鉄大江戸線都庁前駅で解散となります。
(今回、訪ねる広重の作品)「市ヶ谷八幡」、「玉川堤の花」、「四ッ谷内藤新宿」、「角筈熊野十二社俗称十二そう」

- 開催日：11月12日(日)受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時15分　　受付終了：12時45分
- 集合場所：JR 中央線、総武線「市ヶ谷」駅改札出口
- 申込締切：11月２日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆(事業部会)

企画展のご案内

●「徳川将軍家へようこそ」

会期残り僅か お見逃しなく！

会　期：８月11日(金･祝)～９月24日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室
休館日：９月４日(月)

催事のお申込方法

◆**普通はがき(62 円)**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。**
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10 時～12 時、13 時～17 時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会報＜えど友＞第 99 号
平成 29 年９月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：早川良躬(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話 03-3626-9910